

「アレ」とウナギとシェイクスピア

文学部 英語英米文学科

田中 和也

去年（2023年春出版）の『文彩』にもエッセイを投稿しましたがけれども、その冒頭ではオリックス・バファローズの日本一について言及していました。私は関西出身なのですけれども、あの優勝は嬉しかったです。その後、2023年10～11月にはプロ野球日本シリーズにて、「関西ダービー」として、阪神タイガースとオリックス・バファローズとが激突しました。個人的には両方の球団に思い入れがありますので、ちょっとした油断が失点につながるという「一事が万事」といった試合を、息をのんでみていました。私のように野球に詳しくはない人間でも、今回の日本シリーズは、観戦後にどっと疲れるほど、緊張感がありつつもエキサイティングでした。最終的には阪神タイガースが日本一になりましたけれども、どちらかといえば阪神びいきの人間としては、大喜びしてしまいました。もしまだ関西に住んでいたら、阪神百貨店のセールを覗きに行くのになあ、と想像してしまっただけです。

さて、その阪神タイガースの優勝ですけれども、岡田監督の采配や選手への目配りが重要だったということは、素人目にも感じられます。その最たる例の一つが、「アレ」という言葉だと思います。これはもちろん、「あと一勝で『アレ』だ」のように、「優勝」を暗示する言葉です。けれども、阪神タイガースは、むかしから優勝を意識して、力み過ぎて失速、ということが多々ありました（2003年の星野監督の時代に日本一になれなかったときなどもそうだったと思います。これは、ほとんどの高校生の皆さんが生まれる前の話ですね……）。そこで、優勝という目標を選手たちに意識させつつ、しかし同時に距離をとる用語として、代名詞の「アレ」を巧みに球団全体で共有していたのだと思います。確かに、「アレ」だと、内容（＝優勝）を想像できつつも、どこかワンクッションがある分だけ、リラックスして第1位を目指していけるように思います。

この「アレ」の役割は、私を含めて多くの人々の気を引いたようです。実際に、『西日本新聞』でも、なぜ「これ」や「それ」ではなくて、やや指示対象が遠い「あれ」こそが効果的なのかについて、言語学者の川添愛先生によるコラムが掲載されていました。私個人の感覚としても、「アレ」は特定の狭い文脈（＝スポーツ全体ではなくて、プロ野球、しかも阪神タイガース）で共有されたから

こそ、印象に残ったのではないかと思います。たとえば、「アレ」ではなくて、もしも相手チームにも共有しやすく耳に心地よい言葉だと、キャッチフレーズにはなりえなかったのかもしれないと想像しています。

このように考えてみると、言葉というものは、使用される文脈によって、意味や役割が左右されるということが見えてきます。そこで、文脈によって、文の意味や発話者の意図が異なる、ということについて、少し筆を執ってみたいと思います。このことは、言語の仕組み自体や、コミュニケーションについて考えることにも、つながります。

文脈が意味を支配する、ということは、日本語を第一言語（母語）とする人々（私を含む）には、ピンときやすいのではないかと思います。有名な例としては「うなぎ文」というものがあります。たとえば日本語では「僕はうなぎだ」という表現が、話の状況（＝文脈）によっては、なりたちます。文脈無しで「僕はうなぎだ」だけだと、「私はうなぎという生き物です」（英語で言えば“I am an eel.”）に見えてしまうかもしれません。けれども、たとえばこれが食堂だとしてどうでしょうか。お客さんが店員さんに注文を聞かれて、「僕はうなぎだ」と回答すれば、「僕はうなぎを食べたい」（I would like to eat eel.）になるでしょう（ちなみに“an eel”だと「うなぎ一匹」ですが、不可算の“eel”だと「うなぎの肉」になります。これは、a chicken と chicken の違いと同様ですね）。あるいは、この逆の意味もあり得ます。たとえば店員さんが「お嫌いな食べ物はありますか」と尋ねてきて、「僕はうなぎだ」と返答すれば、「僕はうなぎが苦手です」（I do not like eel.）になるわけです。さらに言えば、「僕はうなぎだ」をスーパーマーケットの店員さんに言えば、「僕が買いたいものはうなぎです」（I would like to buy eel.）になることもあります。このように、「僕はうなぎだ」という表現一つで、状況によっては意味が正反対にも、まったく別の意味にも、なりえるわけです。

この「うなぎ文」は、少なくとも英語を第一言語とする人々にとっては、なかなか扱いが難しいそうです。ここには、日本語と英語の構造の違いが影響していると考えられます。たとえば、日本文学研究者のロバート・キャンベル先生は、日本に来てすぐのころに、「あるときたまたま喫茶店で隣に座っている人が『俺はナポリタンだ』と言うのを聞いたそうです。その際にキャンベル先生は、「『この人、どこから見てもナポリの人じゃないのになあ』と不思議に思った」とのことです。キャンベル先生は、この「うなぎ文」（「ナポリタン文」？）に

よって、会話は前後が重要であることや、これによって「日本語はあいまい」という固定観念が人々に生まれたという可能性を、指摘していらっしやいます（『井上陽水英訳詞集』p. 2）。確かに、「は、が＝主語」や「だ、です＝be動詞」という傾向が日本語ではあることから、「俺はナポリタンだ」では“I am Napolitan.”のように、英語圏の人々には聞こえるのかもしれませんが。ただし実際には、「そばが食べたい」とか、レストランでの「僕はうなぎだ」（＝**I would like to eat**）とかのように、「は、が＝主語」や「だ、です＝be動詞」だとは、言い切れません。いずれにしても、「うなぎ文」の例からは、「だ、です」という言葉が便利であることや、それゆえに意味が多義的になってしまう可能性があることは、読み取れると思います（「は、が」と「だ、です」は、英作文や英会話でも要注意です）。

このように考えると、「やはり日本語はあいまいだ、非論理的だ」と考える人がいらっしやるかもしれません。けれども、本当に「非論理的（＝意思疎通のルールが無い）」だったり文法が無かったりしたら、コミュニケーション自体ができないはずです。しかし、実際には日本語を話す人同士で、意見や気持ちを言葉で交換することは、できています。つまり、キャンベル先生が暗に注意を促していらっしやるように、日本語には日本語の論理や慣例があるわけで、決して無法地帯ではないわけです。この「日本語＝あいまい」という思い込みからは、日本語は外国語、とくに英語やフランス語などの西洋の言葉よりも未熟だとする傾向を読み解けて、危うさを感じます（このような傾向は、西洋中心的な考え、いわゆる「オリエンタリズム」に基づいているとも言えると思います。このエッセイの読者の方々には、世界史や倫理などで、この言葉を習っていらっしやる人もいると思います）。日本語もまた、一つの立派な言語であり、卑下をする必要は無いと私は考えます。むしろこのような多義性をゆるす文体が、豊かな表現をもたらしたともいえると思います。

以上のように日本語には、文脈と深いかかわりのある表現が見受けられます。一方で外国語はどうでしょうか。たとえば英語ですけれども、皆さんは中学校時代から文型（SVOCなど）や時制などを、習ってきていらっしやると思います。たとえば、英語で過去形を書くときには、例外はあれども（goとwentなど）、基本的に動詞の末尾に -ed が付くなどといった具合です。そのため、英語にはかつちりとしたルールがあり、論理的に説明できる（あるいは説明しやすい）特色と構造をもっているのだ、とお考えになるかもしれません。私自身、文法は日本語

よりも英語（やフランス語）の方が、詳しく習ってきました。この詳細な学習は、外国語を学ぶ上での必須のステップだからだと言えます。

しかしながら、英語での表現もまた、文脈に左右されたり、それゆえに多義的であったりするという局面が多々あります。たとえば、ウィリアム・シェイクスピア（William Shakespeare）の劇や詩などです。皆さんもご存じだと思いますが、シェイクスピアは世界的な劇作家かつ詩人です。この人ひとりによって、英語の語彙が17世紀においておびただしく増大したということは、否定できません（シェイクスピアの作品は、*Oxford English Dictionary* という英単語を歴史的に記述した辞書【第2版だと全20巻！】でも、群を抜いて引用されています）。まさに英語圏文化がシェイクスピアという巨人の肩に依拠していると言っても、過言ではないのかもしれませんが。その影響力ゆえに、英語圏の高校や世界中の大学で教科書となったり、一般読者にも読まれたりしているわけです。

そのような「偉人」シェイクスピアの代表作のうち一つが『ハムレット』（*Hamlet*）です。この作品においては、まさに英語という言語自体の多義性やそれゆえの豊かさが、読み解けると思います。主人公のハムレットはデンマークの王子なのですが、父親がどうもその兄弟（つまりハムレットのおじ）に殺害されたようなのです。ハムレットは、おじへの復讐をするかどうかを悩みます。そこで彼は、“To be, or not to be—that is the question” (Act 3, Scene 1, l. 55) という、有名な台詞を独りごつのです。これは極めて有名な台詞で、英語圏の新聞とか映画とかでも、たびたび引用されます（たとえば2011年の映画『英国王のスピーチ』では、主人公の皇太子が自分の弱さと向き合うきっかけとなる場面で、これが登場します。いわば、英国の悩める王子が、デンマークの悩める王子の台詞を、読み上げるわけです）。このハムレットの台詞で用いられている単語や文法は、中学生でもわかるような平易なものだと思います。しかしながら、これを解釈したり翻訳したりしようとする、本当に難しいのです。

なぜ難しいのかと言えば、非常に端的に言えば「be動詞の役割」に尽きると思います。英語でbe動詞というのは、①状態を表したり（“It is sunny today.”だと「晴れている」という状態を表す）、あるいは②存在を表したりします（“I am in the office.”だと「私は会社という場所に存在しています」ということ）。それに、①の例である“*It is sunny today.*”のように、be動詞はいわゆる“SVC”の文型、つまり「C（＝補語、すなわちどのような状態かを示す部分）」が付くことが多いです。このため、ひょっとしたらハムレットの“to be”のあとには、何か

補語が来ているが、省略されているのかもしれないのです。つまり大雑把に言えば、

- (1) ハムレットは「自分は存在して良いのかどうか＝生きるか死ぬか」で悩んでいる。
- (2) 実際には **be** の後になにか補語があつて、ハムレットは「～という状態のままではよいのかどうか」で悩んでいる。

という二パターンがまず思い浮かびます。実際に、『ハムレット』の翻訳で最も読まれているもののうち一つである新潮文庫の訳では、(1)を採用して「生か、死か、それが疑問だ」(p. 84) という訳が示されています。

ただし、ここで重視すべきなのは、この劇全体の流れです。先に説明いたしましたように、ハムレットはおじへの復讐をするかどうかで、悩んでいます。さしあたりは、ハムレットは復讐を考えていますので、おじたちを欺くために、意図的に気が触れた様子を示しています。この流れ(＝まさに文脈)を考えれば、この台詞からは「復讐をするべきかどうか」とか「このまま気が触れたふりをしているだけでよいのかどうか」とかいった含意も、解釈することができるわけです。この“**To be**”は、先に強調申し上げたように、言葉というのは「それ単品」で考えてはいけないという好例だと思えます。

しかも、もう一つ興味深いことは、英語を第一言語とする人の感覚です。英語母語話者にとっては、先述の①状態も②存在も、**be**動詞の中には切り分けることができずに、共存しているということです。日本語では①と②は訳し分けますけれども、英語ではこの二つは区別されません。いわば、言語の感覚自体が、違うわけです。英語を第一言語にする人にしたら、**be**動詞は**be**動詞であつて、いちいち意味を分析的に考えて使っているというわけではないようです。すなわち、英語母語話者にとっては、上記の(1)と(2)の解釈が(あるいは他の解釈の可能性もあると思えます)、混然一体となつて、ピシッと直感的に同時にイメージできるわけです。この直感というものは、日本語を第一言語として英語を学ぶ私のような人には、なかなかピンときにくいと思えます。このような感覚の差異からは、英語を学ぶ際にはあくまで「これは日本語とは異なる言語である」ということを意識しつつ、文や単語の意味や構造を、意図的に学ぶ必要があるということも、明白だと思えます。

以上のような英語の「直感」と**be**動詞の多義性が理由で、“**To be, or not to be**”

は、実のところ日本語には翻訳不可能な表現だと私は思います。ひょっとしたら、この文の背景を説明するように長々と訳せば、意味のニュアンスは出るかもしれませんが。たとえば「このまま気が触れたように生きたり今のように復讐をしない状態でいたりして良いのか、そうではないのか」といった具合です。ただこのような訳だと、“To be, or not to be”という、もともとは6単語（音節でも6音節）で表現された歯切れ良いリズムが、消えてしまうわけです。前述の新潮文庫版の「生か、死か」というものは、いわば原文のリズムにも目配りをした、優れた訳だと思います。ハムレットのこの類まれな台詞はたった6単語ですが、「英語を理解するには、翻訳ではなくて、英語の原文自体で読んだり聞いたりしないといけない」ということを、体現しています。ただし、たとえばフランス語やドイツ語などのように、英語と文法や語彙が近い言語であれば、比較的うまく翻訳できるかもしれません（例として、フランス語だと、英語の **be** 動詞に近い *être* という語があります）。

このように「アレ」や「うなぎ文」やシェイクスピアについて考えてみると、言語を理解したり学んだりする際には、それぞれの文や単語を小分けで理解してはいけないということが見えてきます。つまり、前後の文脈を理解する必要があるわけです（英単語や古典の単語を覚えるときに、その単語だけではなくて、長文や例文の方が理解したり暗記したりしやすいのも、ここに何か理由があるのかもしれません）。ただしそれと同時に、文脈を理解するためには、先ほどの **be** 動詞の役割のように、言語の構成を要素一つ一つ丁寧に見ていくことが必要です。すなわち、文脈という大きな単位と、細部という小さな単位とは、言語で意思疎通する際の両輪なのです。これら両輪を学ぶには、なるべく多くの文章を読んだり書いたり話したりすることが、重要です。多くのインプットをこなすと、少なくともある程度は、**be**動詞の感覚というものも、直感的に分かってくると思っています。

同時に最後に申し添えたいのは、このように言語やコミュニケーションを、大局的にも細密にも見るためには、結局は「中身」のある勉強が必要だということです。この能力は、会話優先だけの勉強では、身に付かないものです。たとえば、文章や会話を理解するには、その話の中の文脈だけではなくて、社会的・歴史的な意味での文脈も（＝作品外の文脈）、理解が必要です。今回の『ハムレット』の文脈は作品内部で完結していたかもしれませんが、ただ、たとえば19世紀のイギリス小説では、英国の植民地や人種差別も描かれます。それらを理解するに

は世界史の知識が要ります。重要なこととして、そのように「背景知識を理解しつつ、自分とは異なる『他者』の言葉に耳を傾ける」ということは、異文化コミュニケーションの基本でもあります。このように考えると、たとえば国語科や英語科で長文を丁寧に読むことは、実は英会話などを含めたコミュニケーション全般の土台を作ることなのだということが、見えてきます。古文の勉強などは、日本の文化や歴史を知るだけではなくて、すぐれて今日的な役割も果たしていると、私は思います。さらに申し上げれば、文学や言語学や哲学、歴史学などの人文学は、実は社会にはとても重要なものであるということも、見えてくるのです。

参考文献

Shakespeare, William. Hamlet. 1601. Edited by Ann Thompson and Neil Taylor, the Arden Shakespeare, the 3rd series, revised edition, Bloomsbury Publishing, 2016.

川添愛「阪神の『アレ』 位置関係で変わる指示語」『西日本新聞』2023年10月26日。<https://www.nishinippon.co.jp/item/n/1139914/> 2023年11月21日閲覧。

キャンベル、ロバート『井上陽水英訳詞集』講談社、2019年。

シェイクスピア、ウィリアム『ハムレット』訳：福田恒存、新潮文庫、新潮社、1988（昭和63）年。